資料３

支援者向け

**使たらええで帳**

**～高次脳機能障がいファイル～**

**活用マニュアル**

**平成29年3月**

高次脳機能障がい相談支援体制連携調整部会

高次脳機能障がい支援体制整備検討ワーキンググループ

**目次**

◆はじめに（「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」開発の目的）・・・・・・・P１

◆「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」の構成・・・・・・・・・・・・・・P1

◆「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～って、なに？」＊説明用ちらし ・・・・P3

◆各様式の説明及び使い方

　◇「全体支援経過表」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P４

　◇「本人情報」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P６

　◇「医療情報提供依頼」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P１０

　◇「就労情報」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P１２

　◇「高次脳機能障がい　確認リスト」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・P１４

　◇【\_\_\_\_さんの配慮してほしいこと】（日常生活場面での配慮事項等）について ・・・P１７

　◇参考資料【高次脳機能障がい　生活の大変さ指標】について・・・・・・・・・・・P１９

◆コラム　～ご本人とコミュニケーションをとる上で意識していただきたいこと～・・・P２０

◆ご本人の状態に即した個人情報の取り方やサービスの検討状況について・・・・・・・P２５

◆活用例

　１．病識がないためサービスを拒むケースに対して医療機関と基幹Cとが連携して

障がい受容に寄り添い、障がい福祉サービス［生活介護］に繋いだ事例・・・・・・P２７

　２．障がい受容が不十分なケースに対し、市町村と基幹Cが就労ニーズに対して専

門機関と連携するとともに障がい受容に寄り添い、障がい福祉サービス[就労移行

支援、就労継続B型]に繋いだ事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P２９

　３．就業・生活支援センター、就労移行支援事業所、医療機関等が連携し、ご本人

のニーズと就職先の求める職業能力とに折合がつくよう調整を図った事例 ・・・・P３１

　４．ご家族の在宅支援に入ったケアマネージャーが市町村に繋ぎ、基幹Cが事業所

[居宅介護、指定特定相談]にご本人の障がいの状態について助言している事例・・・P３３

◆コラム～お父さんの初めての工賃～　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P３５

◆資料編

　　□お役立ち情報

　　　○高次脳機能障がいって？

　　　○こんな時どうする？

　　　　・医療費の負担を軽減するには？

　　　　・福祉サービスを利用するには？

　　　　・経済的な支援や生活費の保障を受けるには？

　　　　・就職・復職するには？

　　　　・復職したい、就職したい

　　　　・お金や財産の管理や手続きが難しい。金銭的なトラブルがある

　　　　・自動車の運転はできるの？

　　　　・高次脳機能障がいについての情報サイト

　　　　・相談したい

**◆はじめに（「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」開発の目的）**

本ワーキンググループでは、高次脳機能障がいを有する方々に関わる医療や福祉介護・就労、行政の関係者が、支援に関し必要な情報を入手し、また、支援の工夫点等を共有するための情報伝達手段となる使たらええで帳を開発するとともに、障がいの個別性が高く、その人に応じた個々の支援が必要とされる高次脳機能障がいの状態像の共通指標となり得るものを開発したいと考えました。

高次脳機能障がいの方に関わった支援者が、障がいの存在に気づき、その方の障がい受容等の段階に応じて寄り添い、適切な時期にその方が必要とされる支援を提示し、かつ、つなぐために、また、支援者がどのような支援をすればいいか悩まれている場合に、他の支援者が行っておられる工夫等も共有して、支援方策のヒントを得ていただくことにも活用いただければと考えています。

また、市町村等で開催される個別支援会議の折に、高次脳機能障がいの方の会議においては、使たらええで帳を活用いただき、個別ケースの検討を通じて、支援ノウハウを蓄積し、その中から共通の課題を見出していただくことにも役立てていただければと考えています。

**◆「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」の構成**

使たらええで帳は、【全体支援経過表】【本人情報】【医療情報提供依頼】【就労情報】【高次脳機能障がい確認リスト】及び【＿＿さんの配慮してほしいこと】から構成されており、それぞれの内容は以下のとおりです。

|  |  |
| --- | --- |
| 表紙 |  |
| 様式１  【全体支援経過表】 | 発症から現在までの支援経過を時系列で把握でき、ご本人・ご家族の状況等についても整理できるよう、生育歴や家族関係図と発症からの経過等を記載する表です。 |
| 様式2  【本人情報】 | ご本人の現在の生活の状況や置かれている環境、医療面の情報やご本人・ご家族等のニーズを記載する様式です。 |
| 様式３  【医療情報提供依頼】 | 検査所見も含め高次脳機能障がいの診断の根拠となる発症時の状態像やその後のリハビリ状況、現在の身体状況等、ご本人の医療に関する情報を医療機関から取得するため、ご本人から各医療機関に情報提供を求める際の様式です。 |
| 様式４  【就労情報】 | 支援者が、就労に向けた準備段階にある方の就労ニーズや就労に関する希望をご本人から聞き取り整理したり、希望先企業や実習先等に必要な情報を提供するのに必要な情報を記載する様式です。 |
| 様式５  【高次脳機能障がい確認リスト】 | 支援者が、ご本人の障がいの状態像を確認するため、高次脳機能障がいの注意、記憶、遂行機能、社会的行動・感情の障がい及び日常生活動作の状況等を、ご本人・ご家族から聞き取ったり、支援者が行動観察して記載するための様式です。  支援者が支援の手立てやステップアップを考えていく際に活用いただくことを想定しています。 |
| 様式６  【＿＿さんの配慮してほしいこと】（日常生活場面での配慮事項等） | 支援者が行っている支援における工夫や配慮を記載したり、ご本人・ご家族が望む配慮を聞き取ったりするための様式です。ご本人が生活しやすいよう、現在支援している他の支援者と共有したり、支援を引き継ぐ際に伝達することを想定しています。 |

各様式の活用に関して

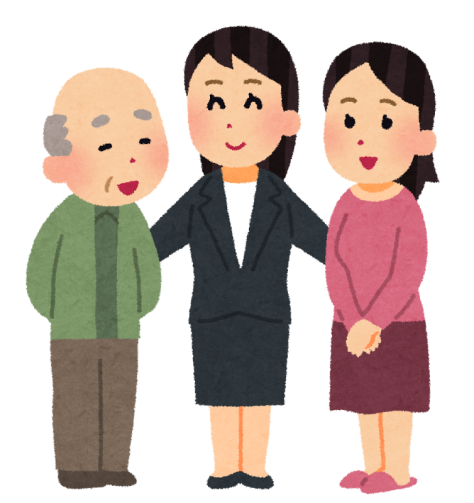
　上記の様式に関しては、高次脳機能障がいの方々の支援に際し必要だと思われる項目を全て集めております。しかし、使たらええで帳の活用に際し、高次脳機能障がいの方の支援を数多くされている事業所、これから支援される事業所に関わらず、既に活用されている様式を一から本様式に置き換えていただくというようなことは考えておりません。今活用されている様式と本様式とを見比べていただき、本様式にしかないものがあれば、その項目、若しくは、様式を既存のものに追加して活用いただき、事業所ごとに使いやすい形でお使いいただければと思います。

なお、他の支援者と支援の連携・引継ぎを行われる際には、既存のものに置き換えていただいて結構ですが、本様式にある項目について、できるだけ情報共有していただくようお願いします。

　また、参考資料として【生活の大変さ指標】を作成しました。

|  |  |
| --- | --- |
| 参考資料  【生活の大変さ指標】 | 上記【高次脳機能障がい確認リスト】と同じ項目で、支援の必要性を「問題なし」から段階を追って指標化し、それぞれどんな支援が必要かを記載したものです。  　サービス事業所等において支援方法を検討される際のヒントとして活用いただく他、市町村における個別の事例検討において、各事例をこの指標にあてはめていただき、全体の傾向とどのような支援方法が功をそうしたか否かを集約・分析いただくことで、支援ノウハウの蓄積をしていただきたいと考えています。 |

　次ページの、「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイルってなに？」については、支援者がご本人・ご家族に使たらええで帳の説明をしていただく際や、使たらええで帳を通して他機関に情報提供をする際に個人情報に係る同意を取られる際に、ご本人・ご家族に使たらええで帳の趣旨や活用するメリットを説明していただく際にご活用ください。



「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」って、なに？

「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」とは、高次脳機能障がいの方が必要なサポートを受けられるよう、発症からの経過や障がいの状態などを記録して、福祉サービスや年金などの申請の際に必要となる情報をまとめておくためのものです。

ご自身やご家族の方が記入していただいてもかまいませんし、病院や相談機関などの支援者に記入してもらい、情報の整理を手伝ってもらうこともできます。

また、現在の支援者から次の支援者へ、ご本人・ご家族の望む支援など、必要な情報を伝えるときに、使っていただくことができます。

「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」を使うメリット

自分で情報をまとめるのは大変！色々なところで、同じことを何度も聞かれるけど、これを見せればその説明をせずにすむね。

支援者間で、みなさんの希望などの大切な情報をもれなく伝えることができます。

いつ発症したか聞かれるけど、時間がたつと思い出せない。これに書いておけば、いちいち前のことを調べずにすむなあ。

年金とかの申請に必要な診断書や検査結果を１つにまとめておけば、便利なのね！

※「使たらええで帳～高次脳機能障がいファイル～」は、大阪府が設置した「高次脳機能障がい支援体制整備検討ワーキンググループ」において検討し、開発しました。

**各様式の説明及び使い方**

**様式１　【全体支援経過表】について**

**この様式は、時系列に経過を追ってわかりやすく全体の流れを知ることと、ご本人・ご家族の状況の整理も目的とした表です。**

**発症後の経過のみならず生育歴等を知ることで、ご本人の土台となっているものが何か考え、今後の支援におけるヒントにしてください。**

**また、大きな事故や病気により環境が激変する中、ご本人・ご家族も混乱しておられる場合には、聴き取りなどの際に、図で経過をともに整理することに役立ててください。**

・「生育歴」「発症からの経過」は発症前と後との変化をわかりやすくするために項目を分けています。

「発症からの経過」の項目には、発症時の状況からどの医療機関にかかったのか（例：職場で倒れる　△△病院に入院）から始まり、それ以降、どのように経過していったのか、入院・退院、サービス利用開始・終了等記入してください。その項目を誰が記入したのかわかるように、記入者名（例：△△病院○○相談員が記入）も併せて記入してください。ご本人やご家族が大まかな年月日を記憶している場合は年月日で、年齢の方がわかりやすいという場合は年齢で記入してください。年月日と年齢が組み合わさっても構いません。

・「関わりのある医療機関・支援機関」の項目には、現在利用している支援機関と通院している病院や関係機関の連絡先だけを記入してください。電話帳としても活用していただくためです。また、担当者が変わる場合もありますので誰から誰になったのかも付け足しておくと以前の情報も得られるかもしれません。

・一目でわかりやすいようにということでこの表を作成していますので、大まかな入院した病院名や期間、退院したあとの関わりのあるところ等の記入のみの方がわかりやすく、時系列としては把握しやすい形です。詳しい内容については他の様式を参考にしてください。

・書き方については「記入例」をご覧ください。

全体支援経過表記入例



**様式2　【本人情報】について**

**この様式は、ご本人の現在の生活の状況や置かれている環境、医療面の情報やご本人・ご家族等のニーズを把握することを目的とした様式です。**

**入院中や退院時にもらっている書類等があればそれを参考にしながら聞き取るとわかりやすいです。**

**今後の手帳や年金等の申請時に必要となる項目も入っていますので、今後どのように支援していくのかということも想定しながら聞き取りをおこなってください。**

**ご本人・ご家族にも今後申請や支援を受ける際に必要になることがあることの説明も必要です。**

**変更や追加があった場合には、その部分だけ更新し、既存のものの上に積み重ねてファイルしてください。**

**以下に、各項目ごとの留意点を説明していますので、聞き取りの際に参考にしてください。**

【医療面】

・手帳等の申請時に必要な情報や、支援の際にこの情報は欲しいという項目が入っています。病院からもらっている書類を見ながら記入していくと間違いがなく状況の整理ができます。各項目において今後聞かれることが多くなると思いますので、ご本人・ご家族に「診断書などのコピーは必ず取っておくと便利ですよ」と助言してください。

・「発症時の状況」は倒れた時や事故の状況（家、外出先、朝、夜など）、誰が発見したのかなどについて、わかる範囲で記入してください。診断書や病院からの情報よりもご家族の方がより詳しい状況等を知っておられることがあり、今後色々な場面で説明をしなければならない状況になった際、月日が経つと記憶が薄れていく可能性もあります。一度書き留めておくと、色々な所に説明する際に役立ちます。

【障がい者手帳】

・精神障がい者保健福祉手帳には、「疾患名」の記載欄がありませんので、何の疾患で手帳を取得したのかを聞いてください。

・利用できる制度の情報提供も必要です。受けていない制度はないのか、また、更新時期が過ぎていないのかも確認してください。特にご家族の方は忙しさのあまり忘れているかもしれませんので、そんな場合は声をかけてあげてください。

【社会資源】

・サービス申請や利用状況についての項目です。地域とのつながりがどれぐらいあるのか、ご本人やご家族が孤立していないかを把握する必要もあります。同じ境遇の方たちに話を聞いてもらったり接し方のポイントを教えてもらったりなど自分たちだけで抱え込まないということも大事だと「当事者・家族会」があることの情報提供も必要となってきます。

・「一日の過ごし方」を聞き取ると生活リズムがみえてきます。今後に向けての支援計画を立てたり、どのように支援に結び付けていくのかを、ご本人やご家族を含め共有する際に、図で整理しながら話をすすめていってください。

・更新等が必要なものについては、医師の診断書や意見書をどの病院で作成してもらったかを記録しておくと便利です。

・「運転免許」の項目は、現在の状況を記入してください。高次脳機能障がいの方は、左半側空間無視や注意障がい等により、運転に支障や危険性がある場合があります。支援者からみて、運転に支障があるのではないかと感じた際には、医師の意見はどうなのか確認したり、運転可否に関しては公安委員会が判断し、その窓口として「適正試験係適正相談コーナー」があることを促してください。医師の判断だけでは運転することはできませんので、公安委員会の運転可否が必要であるということも支援者側は理解しておく必要があります。

公安委員会の「適正試験係適正相談コーナー」について、巻末の資料編【お役立ち情報】にも載せていますのでご覧ください。

【経済面】

・発症から1年半経った際、今後どの障がい年金の申請対象になるのか把握するために「発症時の年金」の項目が大切になってきます。加入状況によって申請可否が変わりますので、各年金窓口に確認が必要となります。

・ご本人の収入がない場合は、誰から（同居者、別居者）金銭的支援を受けているのかも把握しておいてください。助成が受けられるものはないのかということも把握し、必要に応じて助言してください。

・失業保険受給期間延長の申請が出来る場合もあります。巻末の資料編【お役立ち情報】に載せていますのでご覧ください。

【本人・家族等の情報】

・ご本人とご家族またはキーパーソンの要望が違う場合もあります。「望む生活」の項目は互いの障がい理解に対する状況や、それに解離があるか否かを把握する目安にもなります。障がい受容の状況も考えながら支援の方向性も検討していかなければなりません。「発症前後で顕著に変わったこと」を把握することで、ご本人やご家族の抱える生活のしづらさの理解に役立ちます。発症前に関心のあったことや得意だったことは発症後も比較的取り組みやすい場合があります。また、嫌いや苦手なことについてはご本人の努力だけでは出来にくくなる傾向が強くなる場合があります。出来ないことについて、どこをサポートすれば良いのか、あるいは、その部分についてどこまで他者がサポートすべきなのか判断する際の参考になります。

本人情報　留意点





**様式3　【医療情報提供依頼】について**

**この様式は、高次脳機能障がいの確定診断をする際、または、支援方法の検討のために医療機関に診療情報の提供を求める依頼文として活用していただくことを目的としています。**

**この様式を使って、**

**①主に高次脳機能障がいの確定診断をする際に医療機関から医療機関に対して**

**②支援方法の検討のために相談・支援機関から医療機関に対して**

**「欲しい項目」欄に「○」を入れた上で、診療情報の提供を求める際の依頼文として活用してください。**

・ご本人やご家族等からの情報だけでは定かでない場合や、これまで情報を整理していた人が関われなくなり経過がわからない場合など、医療機関からの確かな情報が欲しい場合や、医療機関に対してご本人やご家族では十分な説明をするのが難しい場合に、支援者が手助けをしながら医療機関に情報提供を求めることも想定して、この様式を作成しています。基本的にはご本人・ご家族から医療機関に依頼してもらうのですが、医療機関から不明な点等について質問がある際に、ご本人・ご家族に代わり関係機関が説明する場合も想定し、支援者の連絡先欄を設けています。

・１～1６の項目は、概ね以下の内容に分類されます。

|  |  |
| --- | --- |
| １～６（★印の項目） | 主に高次脳機能障がいの確定診断に必要な項目 |
| ７～1１の項目 | 主に福祉制度や賠償請求の申請に必要な項目 |
| 1２～1６の項目 | 主に支援方法の検討を行う際に必要な項目 |

・「診断書作成履歴」については、ご本人やご家族がどこで何の書類を作成されているかわからない場合に、問い合わせした病院での作成状況を問い合わせるものです。病院に作成した診断書の控えが残っていれば、手帳や年金の申請にあたり、再度の提供を依頼することもできます。

・支援において必要と思われる事について、診断書などに記載されている場合が多くあります。今後必要になってくることがあるということをご本人やご家族に伝え、必ずコピーを取っておくよう助言してください。コピーを持っていることで再度、病院から書類をもらわなくて済むことがあります。

**[情報提供を求める際の注意]**

医療機関から診療情報の提供に伴い、料金（保険自己負担分、紹介状等に係る文書料等）が発生する可能性があることを説明した上で、用紙の下にある、署名欄にご本人および関係機関の担当者名を記載するとともに、ご本人への説明が済んでいるか否かを記入してください。



**様式４　【就労情報】について**

**この様式は、就労を希望している方に、仕事に関する希望やこれまでの職歴等について確認していただいたり、また、就労支援機関や就労希望先又は実習先企業に対して、理解しておいていただきたいことなどをお示しする際に活用していただくことを想定しています。**

・仕事をするにあたり、「一度にたくさん言われると覚えきれない」、「言いたいことがあるのに上手く言葉にならない」などのご本人の状態や、企業側もどのように伝えればご本人が理解しやすいか等、互いの意思伝達方法について知っていると、職場における対応や関係性が円滑になることがよくあります。【高次脳機能障がい確認リスト】【配慮してほしいこと】などを合わせて活用していただき、どの点に配慮すればよいのかやわかりやすい方法は何なのかについて、具体的に企業等に伝えていただけると、わかりやすくて互いに安心です。

・「職歴」については前職があるのか、新規雇用になるのかで本人支援の方向性が変わってきます。また、企業等からご本人に尋ねられる場合も多いため、予め様式に記入しておくことで、何度も説明することを避けることもできます。

・情報を聞きとる中で、ご本人がどこまでご自身の状況を理解しておられるか、また、就労を目指すうえでの課題について、ご本人と支援者側が意見を共有し、今後必要な支援内容について見極めをしていくのに役立ちます。

年金受給状況ですね。

「年金等」の等は不要。それにタイトルは、「現在の年金受給状況」とし、「発症時…」の下におけば。

老齢年金も障がい年金もあるよ。共済年金は厚生年金に一元化されてない？「免除申請」は何？

「直近の書類」て何？

どういう意図？

就労情報　留意点



**様式５　【高次脳機能障がい　確認リスト】について**

**支援者がご本人の障がいの状態像を確認するため、高次脳機能障がいの注意、記憶、遂行機能、社会的行動・感情の障がい及び日常生活動作の状況等を、ご本人・ご家族から聞き取ったり、支援者が行動観察したりして記載するための様式です。**

**支援者が支援の手立てやステップアップを考えて行く際にご活用ください。**

・サービスの利用開始時だけでなく、半年ごとなど定期的にチェックすることで、状態の変化を把握したり、支援を十分に行えているか振り返ったりするのに役立ちます。

・ご本人・ご家族に記入してもらうと、現在の状態をご本人・ご家族が振り返ったり、支援者とともに目標を共有したりすることもできます。また、ご本人・ご家族と支援者の認識のずれについても把握が可能です。

・ご本人・ご家族に記入してもらう際には、気持ちに配慮しながら、結果をどう伝えるか、使たらええで帳のファイルに加えるか否かも含めて判断してください。

＜記入時の留意点＞

・「備考（代償手段等）」の欄には、現在用いている代償手段のことやその活用状況について記入してください。また、代償手段のこと以外の日々の様子や具体的エピソード等も記入しておくと役立ちます。

・代償手段とは、苦手になったことに対して、残された機能や外的手段を用いて補う方法です。その代表例として、記憶障がいがある場合にメモやスケジュール帳、アラームを活用したり、コミュニケーションに障がいがある場合に指さしや身振り・手振り、絵や文字を活用する等があげられます。

・チェックは、「はい」「ときどき（又は、どちらともいえない）」「いいえ」でつけるようになっています。頻度と程度を明確に分けていませんので、項目によってはつけにくいかもしれません。「はい」「いいえ」とは言い切れない場合に、「ときどき（又は、どちらともいえない）」にチェックしてください。

・代償手段等を用いることで、できている場合には、「備考（代償手段等）」の欄にその内容を記入し、「はい」にチェックしてください。

・「ときどき」にチェックがついている項目は、今後できるようになることが期待されやすく、支援にとりかかりやすい項目と考えられます。

・小児の場合は、年齢相応のできることやできないことを踏まえてチェックしてください。



〈項目の説明や記入例等〉

◆項目①～⑤注意について

『注意障がい』の中の、『注意の分配』や『注意の転換』などでいう『注意』とは、ある一つの事柄に気持ちを集中させたり、目配りさせたりする能力を指します。

◆項目⑥⑦⑧記憶について

　記憶の分類の仕方はいろいろありますが、ここでは時間軸で分類しています。

⑥『短期記憶』は、数分～数時間単位をイメージしています。何か指示されたり頼まれたりしたときに、一定時間取り組める位の記憶があるかをはかります。

⑦『長期記憶』は、数日単位をイメージしています。短期記憶よりも保持時間が長く、覚えたことが一旦意識から消えても再生できるくらいの状態をはかります。

⑧『展望記憶』では、先の約束や予定を覚えておけるかをはかります。



メモリーノートの活用や、カレンダーへの記入など代償手段の活用で、生活に支障ない状態であれば、「はい」にチェックし、「備考（代償手段等）」の欄に記載してください。

項目㉑易疲労性について



ご本人の訴え具合や周りの見方などにより、客観的な疲労性についての判断は難しいので、疲労によって「外出予定が変更になる」、「入浴できない（遅くなる）」「食事開始時間が遅れる（家族と一緒に食べることができない）」など生活場面に支障が出るかどうかで判断下さい。

項目㉖移動について



一人で外出できるかどうかで判断下さい。慣れた場所や自宅近辺のコンビニなどには一人で行けるという場合は「どちらともいえない」、交通機関も含めてほぼ自由に外出できる場合は「はい」になります。

**様式６　【\_\_\_さんの配慮してほしいこと】（日常生活場面での配慮事項等）**

**について**

**支援者が行っている工夫や配慮を記載したり、ご本人・ご家族が望む配慮を聞き取ったりするための様式です。ご本人が生活しやすいように、現在支援している他の支援者と共有したり、支援を引き継ぐ際に伝達することを想定しています。**

＜記入時の留意点＞

・記載内容については、支援者とご本人・ご家族で共有しておくとよいでしょう。

・「静かな部屋を用意する」、「苦手な人との同席を避ける」などご本人が過ごしやすくなるような環境設定についても、必要があれば記入してください。

・また、中には、「雨が降る前に頭痛がする」「冬場は抑うつ的になる」等気圧の変化や季節・気候により体調不良や気分の変動が生じる場合もありますので、そういった点にも配慮し、「無理せず静養を促す」といった対応を考えることも必要です。

中途障がい者は、人生の途中に思いがけず障がいが生じ、それまでの生き方（仕事、趣味、人間関係等）を変えることを余儀なくされ、「生きがいがなくなった」「将来に希望が持てない」「自分には価値がない」等といったことを感じやすい状況にあります。また、高次脳機能障がいの症状によりうまくいかないことが増え、抑うつ的になりやすいことが想定されます。そのため、支援者は、一見元気そうに見えても、精神面に留意する必要があります。



**参考資料　【高次脳機能障がい　生活の大変さ指標】について**

**上記【高次脳機能障がい確認リスト】と同じ項目で、支援の必要性を「問題なし」から段階を追って指標化し、それぞれどんな支援が必要かを記載したものです。**

**サービス事業所等において支援方法を検討される際のヒントとして活用いただく他、市町村における個別の事例検討において、各事例をこの指標にあてはめていただき、全体の傾向とどのような支援方法が功をそうしたか否かを集約・分析いただくことで、支援ノウハウの蓄積をしていただきたいと考えています。**

・この指標は、標準化されたものではありませんが、福祉現場での実践的見地から支援方法の一例を掲載したものです。支援方法は個人の特性や能力、置かれている環境によっても異なり、その人に合わせて考えるのが大切です。

・また、適切な対処と思われてもすぐに結果が出るとは限りません。一度にすることを少なくし、反復練習する中で、できることが増えていく場合が多いように思われます。ご本人を追い込まないよう、スモールステップで長期的に見守っていくことが大切です。

・また、症状をなくそうとするのは難しいです。そのため、例えば、興奮している時には、無理やりしずめず、その場から離れたり、話題を変えたりして対応するのも方法のひとつです。その際、発症前から興味関心のあったものだと気持ちを切り替えやすいと思われます。

・指標については、下記の視点を参考に、チェックしてみてください。

|  |  |
| --- | --- |
| 指　標 | 視　点 |
| （０）『問題なし』 | ―――― |
| （１）『環境調整・代償手段』 | 多少うまくいかないことがあっても、自分で工夫したり、環境を整えておくことでひとりでできる場合 |
| （２）『見守り・声かけ』 | 確実に行うためには、周囲からの確認や声かけが必要な場合 |
| （３）『手助け』 | 周囲の人が行動を共にしたり、具体的なやり方を示すなど、言葉以外の直接的な手助けや配慮が必要な場合 |
| （４）『評価・支援検討』 | 現在、適切な支援方法が見つかっていないため、行動観察等を通して再評価したり、支援方法を再度検討することが必要な場合 |

・（４）『評価・支援検討』にチェックがつくと、どのように対応すればよいのかと支援者は悩みますが、その場合には、できないことひとつずつにとらわれず、他のできていることやご本人の強みでカバーをするなど、ご本人が前向き・積極的になれる支援方法を検討してみるとよいと思われます。

・一見すべての能力が低下しているように見えても、発症前にしていたことは、身体が覚えていてできることもあります。例えば、ある魚屋さんを営んでいた男性は、受診の予定を忘れたり、時間通り行動することができないといった様子がある一方で、魚をさばくことは上手にできていました。ご本人が望んだ自営の仕事には戻れませんでしたが、就労移行支援事業所に通いながらボランティアで魚のさばき方を教えるなどして生き生きとした日々を送っていました。支援者は思い込みで対応をせず、発症前までの生活・仕事の様子をお聞きし、ヒントにするのも大切です。

コラム　～ご本人とコミュニケーションをとる上で意識していただきたいこと～

高次脳機能障がいや失語症の影響により、双方向のコミュニケーションをとることが難しい場合があります。その際には、下記のようなことを意識してみてください。

　会話はゆっくりと：内容を理解するまでに時間がかかることがあります。ゆっくりはっきりと伝えたり、ご本人が答えるまで待ったりすることが大事です。

　話をさえぎらない：途中で言葉をはさむと混乱することがあります。話し始めたら話し終えるまで聞くとよいでしょう。

　身振り手振りを活用：うなずく、首を横に振る、大きさや方角を手で示す等身振り手振りを補助的に使うとわかりやすいです。

物や絵を見せる：言葉だけで伝わらない場合でも絵や物を見せながらだと理解しやすいです。

　文字（漢字）を利用：失語症の方は、ひらがな、カタカナよりも漢字の方が理解しやすい場合があります。

メモに書く：その場ではわかっていても、場面が変わると忘れてしまったり、一度にたくさんの話をすると理解していない場合があります。メモに書いて渡したり、その場のやりとりでもポイントを紙に書いて共有しながら進めていくのが良いと思われます。

　その他：コミュニケーションをとるのが一見難しくみえる場合でも、すべての能力が低下しているわけではありません。幼稚な質問や扱いにはご本人のプライドが傷つきます。話の内容や話し方には留意してください。









**ご本人の状態に即した個人情報の取り方やサービスの検討状況について**

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 第1段階 | | 第２段階 | | 第３段階 | 第４段階 |
| ご本人の状態 | ◆病識 | | | | | |
| 気づきなし[障がいに全く気づいていない] | 知的気づき[言葉や症状を知識として知っている] | | 体験的気づき  [体験と知識が結びつき障がいを実感できている] | 予測的気づき  [障がいを理解して予測して行動できている] |  |
| ◆障がい受容 | | | | | |
| ショック  [障がいについて人から言われても否定する、障がいによる不具合・支障を自分以外の人･物のせいにする]　等 | 回復への期待  [まだまだ回復すると思うため障がいに目を向けようとしない]　等 | | 混乱と苦悩  [自分を責める、障がいがある(ありそう)、だがないと思いたい気持ちが行きつ戻りつしている]　等 | 適応への努力  [障がいによる変化を少しだが受入れ始め、今の自分の状態で出来ることを探し始めている。代償手段・福祉サービス等の利用を渋々だが受入られる]　等 | 適応  [障がいによる変化を受入れ、今の自分の状態で活き活きと過ごしている。代償手段・福祉サービス等の利用を前向きに進んで受け入れられる]　等 |
| ＊第1～第4段階へ一方向に進むとは限らず、状況等に応じ行きつ戻りつしながら、徐々に段階が進みます。 | | | | | | |
| 個人情報に係る同意 | 本人の同意望めず | | | 他機関提供に関し、利用契約締結時に同意を確認 | 同左 | 同左 |
| 個人情報同意の取り方 | [個人情報に係る同意]  　ご本人の障がい受容等がまだ十分でないため、行政が支援者に情報提供する要となり、各々の行政機関の個人情報保護条例の本人収集及び目的外提供の例外項目の範囲内で対応。 | | | [個人情報に係る同意]  利用契約時に説明し同意を取る | [個人情報に係る同意]  同左 | [個人情報に係る同意]  同左 |
|  |  | | |  |  |  |
| サービス検討状況 | サービス（見守り等のインフォーマル含む）に繋がらず、ご家族が介護に行き詰まり切羽詰まった状況等で、ご本人への促しと、どのようなサービスであれば意向に沿うか、又それにふさわしいサービスと受入れ事業所があるか検討するための調整が必要 | | | ご家族等の状況をみて、ご本人もサービスを受けることに同意するが、まだ、自らサービスを選択したという段階ではない。 | 障がいについて少しだが考えられるようになり、ご本人の今の状況でどのようなサービスなら受けられるか自ら考えられるようになる段階 | 障がいについて一定受け入れられ、自身の将来を見据え次へのステップアップをしようと前向きにサービス利用を考えられる段階 |
| 支援者全体の調整役 | ◆行政[市町村:福祉事務所、基幹相談支援C,委託相談事業所、府:障がい者自立相談支援C] | | | ◆行政  ◆相談支援専門員  ◆ケアマネージャー | 同左 | 同左 |

【参考】大阪府個人情報保護条例における考え方

１．本人収集原則の例外：①家族、福祉事務所等から受ける当事者の支援に係る相談、②支援に際し医療機関や家族から当事者の医療情報を入手する必要がある場合であって、本人同意が取りがたい場合⇒［条例第７条第３項第７号を適用し、本人同意なしで情報収集可能］

２．目的外利用・提供の禁止：当事者に関する個人情報を、福祉事務所等に情報提供する必要がある場合であって、本人同意が取りがたい場合⇒［障がい者総合支援法等の関係法令の規定により、都道府県が行う相談支援等において関係機関に個人情報を提供することは、個人情報の目的内利用・提供に当たるため、条例第８条第２項第２号を適用し、本人同意なしで情報提供可能］

使たらええで帳活用例

１．≪病識がないためサービスを拒むケースに対して医療機関と基幹Cとが連携して障がい受容に寄り添い、障がい福祉サービスに繋いだ事例≫

|  |  |
| --- | --- |
| **事例の概要** | １８歳の時に交通事故により頭部外傷した男性。左半身の麻痺があり、歩行は不安定。身体障がい者手帳2級所持。注意障がいや意欲低下により動作が止まってしまうため、食事に2時間程度要するなど、生活上の動作全般的に時間がかかることもあり、日常生活全般に、声かけ・介助が必要である。また自発的に話すことが少なく、応答に時間を要する（失語症の症状は特になし）。兄弟に対しての暴言や、公共の場で他者の嫌がる発言をすることもある。回復期病院にて高次脳機能障がいの診断を受けているが、精神障がい者保健福祉手帳はご本人の拒否により申請はしていない。  　回復期病院では、ご本人のリハビリ意欲が乏しく、「退院後の通院リハビリは厳しい」と判断される。退院して自宅に戻るのに際し（発症後1年）、日中一人になることから回復期病院MSWから基幹相談支援センターに退院後の支援の依頼があった。 |
| **支援経過及び具体的な支援・使たらええで帳の活用内容** | 基幹相談支援センターの相談支援専門員がご本人、ご家族のニーズや状況をアセスメント＜①「全体支援経過表」、「本人情報」を相談支援専門員が記入。「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を回復期病院が記入＞。  ご本人は、もともとあり余る元気で周囲が手を焼いており、友人と遊びまわっていた末の事故であったこと、障がいの認識ができていないことから、今すぐに日中活動などの障がい福祉サービスの利用は難しいと判断。ご本人に、大きな事故に遭って入院によるリハビリは終え退院したが、日常生活を送るためにも引き続きリハビリを受けた方が良いことを伝える。ご本人も体が思うように動かせないことはわかっており、「リハビリは受けたい」との意向を示したため、近くの医療機関に通院によるリハビリを打診。週2回リハビリの利用を始めた。（発症後1年半）。  相談支援専門員が、通院の付き添いができないというご家族の状況を踏まえ、通院同行のサービス利用を勧め、利用開始。  　相談支援専門員は、通院先医師やセラピスト、通院同行の事業所ヘルパーと連絡を取り合い、ご本人の状況を把握。並行して、ご本人の暴言等によるご家族の負担感を軽減するため、母と月1回継続的に面接を実施。通院先から得た対応方法のヒントをヘルパーに伝えることも併せて行った＜②セラピストが記入した「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用＞。  　ご本人はリハビリを受ける中で、体を動かすことに対して意欲的に取り組む様子を見せているとの情報をセラピストから得た相談支援専門員は、余暇支援のサービス利用を検討する。（発症後3年）＜③「全体支援経過表」「本人情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用し、月1回（母との面接に合わせて）相談支援専門員が中心になって情報収集し共有。＞。  最初は近場の散歩などからはじめて、徐々に行き先も増やしていき、いまでは障がい者スポーツセンターなど、外出を楽しめようになってきた。まだ食事に２時間近くかかったり、いろいろとこだわりがあったりするものの、定期的に継続してサービスを利用していく中で、ヘルパーとの関係性も徐々に積み上がってきている。  また、障がい者スポーツセンターでは、高次脳機能障がいの人が集まり、一緒に活動をする時間があり、その時間帯に利用することで、ご本人が他の高次脳機能障がいの人と交流する機会を設けた。その交流を通して、ご本人と同じような状態の同世代の仲間ができ、ご本人の障がい認識が高まり、今の状況を受け入れ始めた。その結果、リハビリにも意欲的に取り組むことが増え、また暴言や他人が嫌がる発言をすることなどが少なくなり、日常動作に時間はかかるものの、声かけで切り替えができるようになってきており、ご家族の負担感も減ってきた。＜④通院リハ時、ご本人とセラピストで「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用し、障がい状態を確認＞。  発症から約5年後、ご本人の障がい認識が高まったことを受け、日中活動の場を検討。指定特定相談支援事業所がサービス等利用計画を作成し、生活介護事業所の利用を開始する。現在は生活介護を週4日、移動支援を週1日というペースで、継続的に福祉サービス利用をするまでに至っている＜⑤「全体支援経過表」「本人情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用し情報共有＞。  生活介護事業所では、対人面ではあまり刺激を増やさないよう少人数での活動の場を設定したり、日常動作の声かけをする等の配慮点を職員間で、情報共有し、支援にあたった＜⑥「配慮してほしいこと」を参考に支援を検討し、職員間で情報共有＞。  また、通所開始から１か月間の行動を観察し、ご本人の事業所内での状態をアセスメントした＜⑦「高次脳機能障がい確認リスト」「生活の大変さ指標」を活用＞。その後、事業所では、ご本人・ご家族の希望とすりあわせて個別支援計画を立てた。また、ご本人が好きな体を動かすレクリエーションを取り入れながら意欲を引き出し、安定して通所できるよう配慮している。  徐々に他の人がやっている軽作業や創作活動にも興味を示し、まだ日によって波はあるが、一定時間集中して取り組むことが可能になってきている。  事業所からご家族にも定期的に連絡を取り、家庭での様子の聞き取りを行うとともに、事業所での様子をご家族に伝えるなど情報を共有し、支援に役立てている＜⑧「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用＞。 |

２．≪障がい受容が不十分なケースに対し、市町村と基幹Cが就労ニーズに対して専門機関と連携するとともに障がい受容に寄り添い、障がい福祉サービスに繋いだ事例≫

|  |  |
| --- | --- |
| **事例の概要** | 23歳の時に交通事故により発症した男性。回復期病院にてリハビリを実施。病院から後遺症について説明したものの、取り紛れていてご本人もご家族も記憶していない。左上肢麻痺はあるものの身体面の機能が概ね回復したため、発症後3か月で退院となった。  発症から6か月後、父が身障手帳の申請に市役所に行った際、障がい福祉課職員が発症原因を確認。交通事故による頭部外傷であることを聞き取ったため、記憶面等で発症前との違いをご家族に確認すると、数分前にした会話も忘れていることがあるとのエピソードが聞かれたため、高次脳機能障がいの可能性を指摘し、診断できる医療機関を紹介。高次脳機能障がいと診断される。週2回通院でのリハビリを受けることになる。身障手帳5級取得。高次脳機能障がいとしては、注意障がいや記憶障がいが顕著であるが、易怒性がありご家族への暴言や物を壊したりする様子もあった。 |
| **支援経過及び具体的な支援・使たらええで帳の活用内容** | 母はご本人の障がいを受け入れられず、「この子は、やればできる子なんで、働くことだってできる」と言い続ける。ご本人も障がいの認識は難しく、アルバイトなどで働くもうまくいかず、転職を繰り返していた。その状況を聞いた障がい福祉課職員が障害者職業センターでの職能評価を勧め、判定を受ける。結果は「今は就労の段階ではない」であった。  その後、母からの就労へのプレッシャーなどからイライラすることが多くなり、父に対して手を挙げるといったことがある。父に対してどうしても暴言や暴力が出てしまうことに落ち込んでいるご本人の様子をみた障がい福祉課職員が、ご本人、ご家族と相談し、ご本人は実家近くで一人暮らしすることとなる（発症から1年半後）。  一人暮らし開始に当たり、経験不足により調理や洗濯等を一人で行うことが難しかったため、ご本人も障がい福祉サービスの利用を受け入れる。指定特定相談支援事業所でサービス等利用計画を作成し週3回のヘルパー利用を開始。＜①相談支援専門員、障がい福祉課職員が協力して「全体支援経過表」「本人情報」を作成。ご本人の同意を得て通院先セラピストに「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を記入してもらう＞。  併せて、母にご本人の障がいを受け入れてもらうため、市内にあるご家族会に参加するよう促した。  衝動性コントロールの難しいご本人と指定特定相談支援事業所の相談支援専門員との関係が悪化したため、基幹相談支援センターに相談し、基幹相談支援センターの相談支援専門員がともに支援をしていくこととなった。  衝動性コントロールが難しく落ち込んでいるご本人の精神面を心配した基幹相談支援センターは、障がい福祉課、主治医と相談。基幹相談支援センターが月1回継続してご本人の面接を行うこととなった。隣の家の子どもの声が気になりトラブルになるなど、近隣とのトラブルが増えたため、障がい福祉課職員から社会福祉協議会CSWに見守りを依頼。近隣トラブルの際にもCSWが調整するなどの協力を得た。  発症から2年半後、ご本人の就労への希望は高いものの生活リズムが整っていないため、基幹相談支援センターの相談支援専門員の勧めにより地域活動支援センターの利用を開始。地活では利用者間のトラブルが絶えず、主治医の助言を参考に、ご本人、地活支援者、障がい福祉課職員、相談支援専門員と何度もケア会議を重ねるが、利用継続は難しいとのことで、1年ほどで利用中断となる＜②「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」「生活の大変さ指標」を活用し、ケア会議で情報共有＞。  主治医から、ご本人の就労ニーズを踏まえ、しっかりと作業に取り組める環境のほうが良いのではないかとの助言を得て、通院リハビリを終了し、就労移行支援事業所の利用を開始する。ご本人は作業には取り組むものの、集中力の継続が難しいこと、疲れやすくミスも多いこと、次の作業工程が覚えられず行動が停止することなどがある＜③「全体支援経過表」「本人情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」「生活の大変さ指標」を活用し情報共有＞。  就労移行支援事業所職員との振り返りでは、ご本人が就労に向けての課題を受け入れられない様子があり、また、うまくいかないことが積み重なり事業所内でのトラブルが増える。ご本人、主治医、支援者で話し合い、障害者職業センターで再度評価を受けることとなった。再評価の結果も「今は就労の段階ではない。しっかりと就労に向けた訓練をしたほうが良い」との評価であった（発症後5年）。  評価を受け、ご本人、支援者、主治医で話し合い就労継続B型事業所への通所に変更。作業が簡単な内容になったこともあり、ご本人の混乱が少なくなり、上手くいくことが増える。B型事業所職員も上手くできたことを中心に振り返りを積み重ねていった。また、モニタリング時に、基幹相談支援センター、指定特定相談支援事業所の相談支援専門員がともに面談する際にも、上手くいったことを話題の中心に取り上げていくことで、上手くいかないことへのふり返りもできるようになり、少しずつ自分の状態を受け入れられるようになってきた。  発症から7年経った現在、通所先では、イライラすることがあるものの、職員の促しによって少しずつ切り替えができるようになってきており、トラブルもほとんどなくなってきた。3か月に1回のモニタリング時にご本人、支援者が集まり、ご本人の状況を共有し、一致した対応ができるよう、連携しながら支援を行っている。また母もご本人の障がいを受け入れることができるようになり、日々ご本人なりに生活をしているご本人を肯定的に受け止められるようになり、父母との関係性も改善してきている＜④モニタリング時「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用＞。 |

３．≪就業・生活支援センター、就労移行支援事業所、医療機関等が連携し、ご本人のニーズと就職先の求める職業能力とに折合がつくよう調整を図った事例≫

|  |  |
| --- | --- |
| **事例の概要** | 相談時４０代後半（飲食店自営）の男性。家族は妻(パート勤務)、長男(就労)、長女（学生）とご本人の４人家族。脳梗塞を２度発症し、急性期病院で手術、回復期病院でのリハビリを経て退院し自宅に戻る。ADLは自立しているが、軽度の身体障がいと記憶障がいが残存し、回復期病院で高次脳機能障がいの診断を受ける。退院後、一旦家業に復帰するが、「手が震えて字がうまく書けない、言葉がすぐに出てこずうまく話せない、体のバランスが悪く動作も緩慢、仕事内容が覚えられない」等の症状のため、接客を伴う仕事の継続は難しいと判断し店をたたんだ。  ご本人は、再度飲食業の職に就きたいという気持ちが強く、就職活動のためハローワークの障がい担当の専門員に相談。精神障がい者保健福祉手帳の取得をすすめられる。近くの医療機関に通院し、リハビリ訓練を受ける。発症から半年後、精神保健福祉手帳診断書を作成してもらい2級の手帳を取得。ご本人は障がい者枠での就労を希望しており、ハローワークから地域の就業・生活支援センターにつながる。 |
| **支援経過及び具体的な支援・使たらええで帳の活用内容** | 近くの医療機関でリハビリ訓練を受ける際、主治医がご本人を通じ回復期病院から診断結果等の情報を得た。＜①「医療情報提供依頼」により提供を求め、回復期医療機関から診療情報提供書及び看護サマリー、リハビリサマリーが提供される＞。  発症から1年半後、ハローワークからつながった就業・生活支援センターの担当の就業支援員が、ご本人のニーズや状況のアセスメントをする。＜②「全体支援経過表」、「本人情報」、「就労情報」を活用＞。  就業・生活支援センターの就業支援員が同行し、障害者職業センターにて職業評価を受ける。結果、記憶面で細かな点を思い出せない、注意力の面で複数のことを同時に行うのが困難、易疲労性があり考えながら作業をすると疲れが生じやすいこと等がわかった。ご本人と障害者職業センターの職業カウンセラーと就業・生活支援センターの就業支援員が話しあい、すぐに就労を目指すのでなく、一定期間の訓練を経験した方がよいとの助言を受け、就労移行支援事業所に通所を開始する。＜③「全体支援経過表」、「本人情報」、「就労情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用し情報共有＞。  この間も近くの医療機関のリハビリには週に1回通っており、就労移行支援事業所からの情報提供の依頼をうけ、医療機関のセラピストが、リハビリ計画による評価から障がいの状態に関する情報を提供。＜④「高次脳機能障害がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用＞。  発症後２年半がたち、ご本人は記憶・言語面等の障がいについて気づきが出始めるが、思うように手が動かせなかったり、作業訓練で一度に二つの動作が苦手だったりすることでいら立ちを見せることもあった。職業センターの職業評価の結果や就労移行支援事業所のアセスメントを参考に、「メモや手順書をみての作業の仕方を身につける」、「こまめに休憩をとる」、「いらいらしたときのストレスの発散方法を考える」などに取り組んだ。就労移行支援事業所の担当支援員が、ご本人が一定病識を持ち、障がいに対する認識も得たタイミングで、ご本人と障がいの状態について共有した。＜⑤「高次脳機能障がい確認リスト」を記入＞。  また、就労移行支援事業所でのグループワーク参加によって、同じ障がいの仲間と交流することで、自分に合う仕事は何かを考える機会となった。就職に向かっての実習では、作業をしながら、自分のできている部分と苦手な部分を整理していった。倉庫作業や工場の実習に行き、実習先からの評価を受けて就労する上での課題を聞き、就労支援員の助言を受けながら振り返りを続けた。  ハローワークや就業・生活支援センター、就労移行支援事業所が連携して支援にあたる中で、現在の自分の状況に合致している仕事のイメージを持てるようになり、指先の細かい作業を求められない職種を選ぶようにした。  発症後３年半後の現在、障がい枠の嘱託職員として就労している。職場に定着するまで就労移行支援事業所のジョブコーチが入り、職場内の環境調整を行った。＜⑥「就労情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を就労先と情報共有＞。  就業・生活支援センターの就業支援員が定期的に職場訪問をし、就労先とご本人と就業・生活支援センターの就業支援員が顔を合わせて現状の確認をするなどアフターフォローをしている。＜⑦「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」の活用＞。 |

４．≪ご家族の在宅支援に入ったケアマネージャーが市町村に繋ぎ、基幹Cが障がい福祉サービス事業所にご本人の障がいの状態について助言している事例≫

|  |  |
| --- | --- |
| **事例の概要** | ２２歳で交通事故による頭部外傷で高次脳機能障がいを有することとなった男性（現在４０歳）。自宅で両親と暮らしていたが、父は10年前に他界し、母と二人暮らし。ご本人は、ADLには特に問題はないものの、失語症があり、高次脳機能障がいによる遂行機能障がいにより、見通しが立てられず、指示がなければ行動できない。（リハビリを受けた病院で高次脳機能障がいの診断書交付ずみ）  母は、「この子は何もできないのだから、全て周りの人間が世話してあげないといけないんです」と、これまでご本人の生活の一部始終の面倒をみてきておられた。月に1回の病院受診が唯一外出する機会となっている。  　キーパーソンだった母が高齢のため介護が必要になり、かつ、病院に入院する必要が生じたため、残されたご本人の生活がたちまち成り立たなくなると感じた母のケアマネージャーが市の障がい福祉課に相談し、市担当者が基幹相談支援Cにつないだ。 |
| **支援経過及び具体的な支援・使たらええで帳の活用内容** | 基幹相談支援Cの相談支援専門員がご本人への聴き取りと、キーパーソンである母の入院先をケアマネージャーとともに訪れて聴き取りを行い、ご本人の状況について整理。＜①「全体支援経過表」、「本人情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」＞に記入。  ご本人から、母がいなくなると一人で生活するのが不安ということを聞き、ホームヘルプサービスの説明をすると、利用を承諾。障がい支援区分認定を受けた。基幹相談支援センターが、指定特定相談支援事業所につないだが、指定特定相談事業所から高次脳機能障がいの方の支援経験があまりなく助言をしてほしいとの依頼があったため、基幹相談支援センターが後方支援を行うこととなった。＜②「全体支援経過表」、「本人情報」「高次脳機能障がい確認リスト」「配慮してほしいこと」を活用＞  指定特定相談支援センターが居宅介護事業所と調整し、サービス等利用計画を作成、利用開始。  その間、主治医の診断結果等の情報を得るため、ご本人を通じ主治医から診断結果等の情報を得た。＜③医療情報により診療情報等の提供を求め、主治医からは診療情報提供書が提供される＞。  サービス利用開始後のモニタリング時において、指定特定相談支援事業所及び基幹相談支援センターの相談支援専門員と、居宅介護事業所とが、ご本人の状況について、上記の①、②の情報を共有。支援をはじめた居宅介護事業所から、ご本人が日常的な会話をかわすことができることから、「本当はわかっているくせに、気まぐれでしないで困っている」という声が上がったが、これまでの支援の中でご本人の状態を見立てられている基幹相談支援センターの相談支援専門員から、話ができても内容が伴っていない感覚性失語に関する説明と、これまでやってきたことをその通りにならできるが少しでも変われば混乱してしまうことや気まぐれではなく遂行機能障がいによるものであることを説明し、そのような場面でどのような配慮をすべきかについて居宅介護事業所と指定特定相談事業所の相談支援専門員に助言をした。＜④「配慮してほしいこと」「生活の大変さ指標」を活用＞  　助言を受けた居宅介護事業所が、配慮すべき事項に添い支援をする中で、徐々にご本人との関係がうまく取れるようになってきている。 |

　コラム　～お父さんの初めての工賃～

　Aさんは、働き盛りの４０代で脳血管障がいにより高次脳機能障がいに。下肢に残るマヒにより杖歩行は短時間でないと難しく、記憶障がいと遂行機能障がいにより、もとの仕事には戻れず、現在は、就労継続支援B型の事業所に週５日通っている。

　自宅で、妻と２人の子ども（小学５年生と小学２年生）と暮らしており、妻が働きにでて一家の家計を支え、家に帰れば家事と子どもの世話を一手に引き受けてくれている。

　現在の収入は、Aさんが働いていたころの収入から見るとガタンと減り、本音を言うと家計は火の車、就労継続支援B型に通うための費用だって、妻の収入から出ていると思うと、Aさんは妻に正直に気持ちを伝えられないけれど、内心本当に申し訳ないと思っている。

　Aさんの妻も、これまでの生活が激変し、まさか自分が働きにでるなんてと思っていたが、これも家族のためだと思い、また、だれもいない自宅に夫を一人でおいておくのも心配で、どこか日中夫の様子をみていてほしいと思い、相談した市から就労継続支援事業所のことを聞き、二人で見学に行った。そちらでは、夫と同じ高次脳機能障がいの方が通われていて、長い方では１０年以上も通われているとのこと。色々な作業をされている様子を見て、夫も興味を持ったようだったので、その事業所への通所を決めた。

　Aさんは、その事業所で牛乳パックの紙漉きの作業を何とか覚えようと一つ一つの工程をメモを取りながら確認し、一生懸命取り組まれていた。

　そして、初めての工賃の支給日。Aさんは封筒に入った１万円を大事に自宅に持ち帰り、妻に渡した。妻も工賃がでるとは思っていなかったので、とても喜んでくれた。

次の土曜日、夕食時に妻は夫と子どもを誘い、家族みんなで近くのファミリーレストランに。外食なんて本当に久しぶりで、はしゃく子どもたちに、Aさんの妻は、「今日は、お父さんが一生懸命働いてもらってきてくれたお金で、このごはんを食べるんだよ。みんな、お父さんにありがとうって言ってね」と伝えた。

「ありがとう、おとうさん！」という子どもの顔をみて、Aさんはうれしそうに微笑み、心の中で、妻と子供たちに「ありがとう」とつぶやいた。